

聞一多から見た魯迅

鈴木 義 昭

キーワード

「清華大学文学会『魯迅追悼会』」・「魯迅・聞一多の韓愈観と文人意識」・「新月社」・「魯迅逝世八周年紀念会」・「毛沢東『文芸講話』」

(1)

周知のとおり、魯迅は1936年10月19日、上海で結核のため病没する。時に五十六歳であった。それに遅れることわずかに5日、10月24日には、北京の清華大学文学会は、魯迅追悼会を催した。聞黎明・侯菊坤『聞一多年譜長編』（湖北人民出版社1994、7以下『年譜長編』と略称する。本書については、雑誌「東方」1995、7で、多少紹介したので、そちらを参照されたい）は、

是日、清華大學文學會追悼這位中國新文化運動的主將。先生不避所謂“新月派”之嫌，出席追悼會并發言。（この日、清華大学文学会は中国新文化運動の領袖を追悼した。先生は、「新月派」の嫌いを避けず、追悼会に出席し、発言を行った。）

として、聞一多がこの追悼会に参加したことを記している。同時に、「『新月派』の嫌いを避けず、……」と書いているが、後ろでも少し触れるように、「新月」派と魯迅との反目は、世人周知の事柄であった（ただ、必ずしも聞一多がそうした論争に関与したわけではないのであるが）。恐らく『年譜長編』は、この辺りを意識したものと考えられる。

『年譜長編』が意識的に引く所の「朱自清日記」は、聞一多の言として、

以韓愈比魯迅，深贊韓愈之文体改革運動。

のように言ったと記す。さらに、詳しくは、趙儷生という人物の手になる「魯迅追悼會記」（1936, 11「清華副刊」第45卷，第1期所載，『全集』Vol. 2「文艺评论・散文杂文」による）では、聞一多の言として、次のように書かれる。

魯迅先生死了，除了滿懷的悲痛之外，我們還要須以文學史家的眼光來觀察他。我試想一下，在中國文學史上的人物中支配我們最久最深刻，取着一種戰鬥反抗的態度，使我們一想到他不先想到他的文章而先想到他的人格的，是誰呢？是韓愈。唐朝的韓愈跟現代的魯迅都是除了文章以外還要顧及到國家民族永久的前途；他們不勸人作好事，而是罵人叫人家不敢作壞事，他們的態度可說是文人的態度而不是詩人態度，這也就是詩人與文人的不同点。

と。「国家や民族の永遠の前途までを念頭に置いていた」、「人によいことをするように勧めなかった代わりに、人を罵ることによって、強いて悪事を行わせないようにした」と言ったとし、それが文人の特色であるとする。さらには、一多が発言中に挿入した魯迅と自分とのエピソードを紹介する。すなわち、

我跟魯迅先生從未會見過，不過記得有一次，是許世英組閣的時候，我們教育界到財政部去索薪，當時我也去了，談話中間記得林語堂先生說話最多，我是一向不喜歡說話的，所以一句也沒有說，可是我注意到另外一個長胡鬚的人也不說話，不但不說話，并且睡覺。事後問起來，才知道那位就是魯迅。

と。要するに簡単に言えば、一多が「韓愈と魯迅は文人ではあるが、詩人ではない」と考えていたこと、そして、彼も魯迅も「しゃべることが好きではなかった」ということである。延いては1936年のこの頃には、一多も自分を単なる詩人としてではなく、文人と意識していたと推察することができよう。

ところで、許世英が組閣を行った時と言えば、1925年のことである。政

府は閣議で、教育経費150万元支出を約束していたが、実際には、その三分の一の50万元しか拠出しなかったため、各校は教職員の月給が支給できなくなっていた。そのため、北京の国立九校の教職員による陳情（「索薪」）がしばしば行われている。一多が魯迅と初めて出会ったのは、26年1月16日に行われた時のものである。彼は、北京芸術專科学校を代表して、教育部に赴いた。回想というものは、得てして回想をしている時点に過去を引き寄せることがあるものであるが、これに拠ると、早くも26年1月の時点で、彼は自分と魯迅との性格の共通点を見出していたかのようではないか。

それに先立つこと10か月、1925年3月初旬に書かれた、アメリカからの梁実秋への書簡（『全集』Vol. 12所収「致梁實秋」）によると、「河圖」という雑誌を清華の卒業生で、アメリカ留学生でもある、仲間出版しようという話が出ている。ここに魯迅の名前が挙げられているのである。彼の心積もりの中では、第一期から第四期の掲載目録までがすでにできあがっており、魯迅以外にも、次のような人々の名前と論文の題目が挙げられている。各期別と人とその題目とを以下に示しておく。

「河圖」第一期：吳新吾「陳師曾像」／聞一多「詩」／楊廷寶「建築圖案」／徐志摩「散文」／熊佛西「萬人坑」／梁實秋「批評之批評」／余上沅「舊劇之欣賞」／張嘉鑄「中國繪畫在西方之勢力」／潘光旦「李義山之精神分析」

「同」第二期：聞一多「塞藏贊」／梁實秋「惠特曼贊」／郭沫若「詩」／趙畸「獨幕劇本」／趙元任「音樂論文」／魯迅「短編」／張嘉鑄「塞藏小伝」／林徽音「帕敷羅娃的藝術 Pavlowa」／梁實秋「小品」

「同」第三期：余上沅「欲曙天（劇本）」／梁實秋「詩」／聞一多「奈陀夫人的藝術」／陳通伯「散文」／郁達夫「短編」／張嘉鑄「中華美術館芻議」／劉奇峰「散文」／林徽音「中華婦女服装問題」／羅沅「園亭布置」

「同」第四期：郭沫若「詩」／余上沅「辛基底藝術」／冰心女士「短編」／張欣海「小泉八雲」／梁思成「中國建築」／聞一多「畢痴來 (Aubrey Beardsley)」／張嘉鑄「芬勒樓札 (Ernest Fenolossa)」／梁實秋「散文」

この目録からも、かなりなことが類推される。例えば、翌1926年四月に創刊される「晨報副刊・詩鐫」や同年六月に創刊される「晨報副刊・劇刊」、されには、1928年三月に創刊される（第一次の）「新月」の雛形と言うことができるかも知れない。ここで、聞一多は以下の四点を注意すべきこととして挙げている（前掲書）。

(一) 非我輩接近之人物如魯迅，周作人，趙元任，陳西滢或至郭沫若，徐志摩，冰心諸人宜否約其投稿。我甚不願頭數參入此輩之大名，彷彿我們借他們的光似的。我們若有創辦雜誌胆量，即當親身赤手空拳打出招牌來。且從稿件方面看來，并不十分倚仗外人的輔助。

(二) 排印法宜橫行或直行？

(三) 宜否加入外國文字之作品，如熊正瑾之“Thrice Promiss Bride”等々？

(四) 要打出招牌，非挑釁不可。故你的“批評之批評”一文非作不可。用意在將國內之文藝批評一筆抹殺而以正當之觀念與標準。上沅又將作五年來之中國新劇本意亦在示人以下馬威也。要一鳴驚人則當挑戰，否則包羅各派人物亦足哄動一時。此問題與。

(一) 乃是爭點之正面與反面，孰舍孰從，請示知。

と。(二)の「印刷の仕方は、横組みにするか、縦組みにするか」と(三)の「熊正瑾の英文の作品は加えるかどうか」など、紙面の体裁や英文をそのまま載せるかどうかについて述べてあるだけで、重要な部分は、言うまでもなく(一)と(四)とである。(一)に挙げられた人物名は、私たちにとってかなり馴染みのある名前と言えるし、(四)では、そうした人々にイニシアチブを握られたくないとする青年らしい自負の気持ちも十分に看取されよう。こうした人物について大雑把な分け方をすると、前半が散文系の作者であり、後半

が韻文系の作者とも言えるし、前半が「文学研究社系」であり、後半が「創造社系」及び「新月派系」と言うこともできよう。その中で、魯迅の名前は、(一)の第一番目の筆頭に挙げられているわけである。第一番目に挙げられているからといって、必ずしも尊敬の順番を示しているわけではないであろうが、彼の意識の中で、最初に挙げざるを得ない名前と考えることもできるかと思われる。魯迅は当時の青年たちにとって、それほどの意味を持っていたと言うこともできるのではなかろうか。

なお、魯迅以外の人物として、郭沫若の名前が挙げられて当然である。彼の詩集『女神』に対する批評（『『女神』的時代精神』、『『女神』的地方色彩』、いずれも1923年の6月3日、10日「創造週報」No. 4, No. 5に発表）を行っており、日本とアメリカとで手紙のやり取りなどとした旧知の間柄であった。徐志摩とは、清華学校の後輩、張嘉鏄との縁（彼の妹は徐志摩の最初の妻、張幼儀）もあり、帰国後間もなく紹介され、聞一多は「新月社」に加入する。陳西滢とも、「新月社」を介して知り合いになるし、冰心とは、アメリカ在留中に中国古典劇『琵琶記』をともに公演した仲であった（聞一多は衣装係を務める）。こうしてみると、魯迅（周作人も含めてよいかも知れない）だけに特別な感じを抱いていたと考えてよいのではないか。

(2)

ところで、聞一多の魯迅に対する態度（評価）を知るには、幾つかの方法がある。彼の友人である梁実秋と魯迅との論争を眺めておくのも一つである。この中から、魯迅と梁実秋との違いが現れ、同時にまた、梁実秋と聞一多との微妙な点があぶり出されるのではないかと思う。梁実秋とは、多少色合いが違うようであるが、徐志摩のものも必要に応じて眺めなくてはならないであろう。何故ならば、聞一多は直接に魯迅との論争を行っていないからである。ただ、本稿では、主として聞一多の方から眺めておきたい。

魯迅と梁実秋との間で論争が行われていた時期、当の聞一多本人は何をしていたのか。1925年6月1日、聞一多はアメリカから上海に上陸する。三年ぶりに故国に帰った聞一多を迎えたのは、「五・卅事件」であった。上海では、洪深や欧陽予倩たちの歓待を受け、是非とも上海に止まるようにという申し出もあったが、彼らはそれを断り、北京に戻る。国劇運動を展開し、「芸術劇院」を設立するには、北京が最も相応しいと考えたからであった。北京では、余上沅たちと独身者の気楽さで一緒に住む。この頃の聞一多は、アメリカで結成された国粹主義的団体、「大江会」の運動にも熱心であった。こうした国粹的なものを「愛国主義」と取るかは問題の多いところであるが、1994年北京で開かれた「'94聞一多国際シンポジウム」では、年配の人々は後の暗殺に繋がる、一貫した愛国主義精神の発露という具合に見ておられた。一多は、7月、趙太侔、余上沅、孫伏園たちと「北京芸術劇院計画大綱」を起草する。二年間も残っていた滞米猶予期間を無視して、彼が中国に戻ったのも、実はこのためだったわけである。その組織から建物、経費、人件費、訓練生の時間割までを書いたものが『年譜長編』に記録されている。8月、正式に「新月社」に加わり、その会合に参加する。弟の聞家駟氏への便りには、

我等已正式加入新月社，前日茶叙時遇見社員多人，中有湯爾和，林長民，丁在君（話問談及舒天）等人。此外則北大及北大外著名教授大多皆社員也。新月社已正式通過援助我輩劇院之活動。徐志摩頃從歐州歸來，相見如故，且于戲劇深有興趣，將來之大幫手也。

と書いている。要するに、「新月社」への加入は、戯劇運動に対する援助を取り付けるためであったというわけである。9月からは、北京美術専門学校に勤務することになる。美専への紹介は、新月社の社員、劉百昭の伝によるもので、聞一多と一緒にアメリカから帰って来た余上沅、趙太侔も一緒であった。10月になると、「大江会宣言」が発表される（『清華週刊』Vol. 24, No. 5）。この号には、アメリカから原稿を寄せた梁実秋の翻訳、「文学里的愛国主義」も発表されている。「大江会」というのは、清華学

校一九二一級から二四級までのアメリカ留学生によって組織されたものである。この秋（十月末）には、アメリカ、イギリス、フランス、日本など十四カ国による「自主関税促進会議」が開催されている。これも彼らのプライドを痛く傷つけたに相違ない。聞一多たちは、これに反対する決議を行う。また、各種の国家主義団体を糾合した連合会（北京国家主義団体連合会）も作られ、「大江会」も加盟する。翌1926年1月、西京畿道に引越しをして、家族を呼び寄せる。ここの一室が、徐志摩が紹介（「晨报・詩鐫」第一期「詩刊辯言」）して有名になった「小黑房子」というわけである。聞一多の代表作と目される、「死水」，「聞一多先生的書卓」がここで作られている。聞一多は、1月23日、梁実秋宛に次のような手紙を書いている。

（前略）國內赤禍猖獗，我輩國家主義者際此責任尤其重大，進行益加困難。國家主義與共產主義勢將在最近時期內有劇烈的戰鬥。我不但希望你趕快回來，并且希望多數同志趕快回來。

と。「国内赤禍猖獗」という言葉や、「国家主義と共產主義勢は近々激烈な一戦を交えるであろう」などという言い方から、聞一多の思想的立場は想像できるかと思う。果たして、国家主義団体内の両陣営の争いに端を發した諍いに、共産党が介入した「暴力ざた」が起こる。これは、ソ日の東北出兵に反対する国粹主義団体内部での事件である。さらに、3月18日には、国家主義団体連合会が国民党北京支部及び國務院に陳情のための示威行動を行った時に、軍警が同時に集会を開いていた群衆に発砲するという、「三・一八事件」が発生する。この時、彼の芸術専門学校での教え子、姚宗賢が死亡し、譚祖堯が死傷する。これに抗議して、「悼詞——紀念三月十八日的慘劇」という詩（「国魂週刊」第十期 1926,3,26）と「文藝與愛國——紀念三月十八日」という文章（「晨报・詩鐫」創刊號 1926,4,1）を書くわけである。その詩の第一聯は、

沒有什麼！父母們都不要號咷！

兄弟們，姊妹們也都用不着悲慟！

這青春的赤血再寶貴沒有了，
盛着他固然是好，潑掉了更有用。

と書かれる。また、「文藝與愛國～～」は、

鐵獅子胡同大流血之後《詩刊》就誕生了，本是碰巧的事，但是誰能說《詩刊》與流血——文藝與愛國運動之間沒有密切的關係？——所以我們覺得諸志士們三月十八日的死難不僅是愛國，而且是最偉大的詩。我們若得着死難的熱情的一部分，便可以在文藝上大成功；若得着死難者的熱情的全部，便可以追他們的踪跡，殺身成仁了。

因此我們就將《詩刊》開幕的一日最虔誠的獻給這次死難的志士們！

と書かれる。徐志摩は、この号に「詩刊弁言」を發表する。それによれば、

這第一期是三月十八血案的專號，參看聞一多君的下文。

とあって、聞一多主導の下、「詩鐫」第一号が發行されたことが分かる。なお、大陸から出された1991年版の『徐志摩全集』（卷4，広西民族出版社刊）では、この部分が削除されている。この時、魯迅も有名な文章「紀念劉和珍君」を書いて、この事件で虐殺された北京女子師範大学の学生、劉和珍に哀悼の意を捧げる。共に教え子を軍警の発砲によって失うということになる。聞一多は、さらに、人力車夫の口を借りて書いた「天安門」も發表している（「晨報・副刊」No.1370 1926, 3, 27）。

同じく、梁実秋への手紙の中で、

我近來懊喪極了。當教務長不是我的事業，現在騎虎難下真叫我爲難。現在爲校長問題學校不免有風潮。劉百昭的一派私人主張挽留他，我與太侔及蕭友梅等主張歡迎蔡子民先生，學校教職員已分爲兩派，如果蔡來可成事實，我認爲他是可以合作的。此外無論何人來，我定要引退的。今于報載我要當校長，這更是笑話。‘富貴于我如浮雲！’我只好這樣嘆一聲。

と述べているが、劉百昭という人物は、「新月社」の同人の一人で、聞一多が「美專」に入る時に、紹介の労をとってくれた人物でもある。言わば、

恩人とも言うべき人であった？わけであるが、聞一多は劉百昭一派と対立してしまう。魯迅は、「墳」所収の「論“費厄潑頼”應該緩行」の七「論“即以其人之道還治其人之身”」中で、「フェアプレーにはとりわけ流弊が多く、酷い時には、弱点ともなり、却って悪い奴らに口実を与えてしまう」と言って、その例として、劉百昭を出して来る。劉百昭はドイツ留学生で、25年当時、北洋軍閥政府の教育部専門教育司司長で北京芸術専門学校校長を兼ねることになる。25年8月、章士釗の命を受けて、北京女子師範大学を接收し学生と衝突するという愚行を行い、魯迅に激しく批判されている。その他には、「華蓋集」の「“壁”之餘」、「華蓋集続編」の「雜論管閑事」・「做學問」・「灰色等」、「同」・「有趣的消息」等で、魯迅の嘲笑の対象となっている。一多は、五四時期の闘將の一人、蔡元培には一目を置いていたが、その他の人物を校長に戴くことはできないと言うわけである。魯迅が徹底的に嫌い抜いた人物を聞一多も大いに嫌ったということになる。聞一多の魯迅に対する評価とも若干の繋がりはあるのかも知れない。蔡元培を「車引き流」と落としそめた人物がいる一方で、人力車夫の口を借りて、詩を作る人物がいたというわけである。また、この手紙からは、彼の曲がったことが嫌いな精神、世俗的なことに関しては、無欲恬淡としていたことなども読み取っていいであろう。

この後、聞一多は、26年7月、北京芸術専門学校を辞職し、一旦は故郷の希水に帰り、8月、改めて、上海に向かう。と言うのも、この間、北京では、重大な変化が起こるからである。すなわち、馮玉祥が臨時政府を転覆し、直隸軍と奉天軍との矛盾が拡大し、奉天軍が北京に入城すると、赤化を名目として大学、文化人などに対する弾圧が始まる。聞一多もこの学期をそこそこ終えると郷里に帰る。1932年9月、清華大学に戻るまでの、聞一多の多難な時代を迎える。そして、9月、上海の呉淞国立政治大学に職を得る。この大学の校長は、清華の後輩、張嘉鏞の兄、張君勱が務めており、張嘉鏞、潘光旦が教鞭を執っていた。上海では、「時事新報」という新聞が発行されていた。以前は進歩党などの機関紙的なものであったが、

この頃には党派性を失い、潘光旦、饒孟侃や、26年7月に帰国した梁実秋などが編集に当たっていた。聞一多は、これに「貢献」、「罪過」、「收回」、「口供」、「莫怨我」、「你指着太陽起誓」などを投稿している。27年7月1日、「新月書店」が上海で営業を始める。聞一多は、徐志摩、梁実秋、張嘉鏄、潘光旦等とともに理事になる。新月書店は、会員たちの書籍を発行するのを主務としていて、月刊の雑誌「新月月刊」が発行されるのは、翌年の3月10日である。因みに、彼の第二の詩集、『死水』が新月社から発行されたのは、28年の1月のことであった。この頃から、聞一多は、中国の古代文学の論文を発表し始める。「時事新報・學燈」に掲載された「詩經的性慾觀」である。27年8月には、南京に赴き、9月から南京第四中山大学（後の国立南京大学）で教鞭を執ることになる。従って、聞一多は、「新月月刊」への投稿はしたものの、実務にはあまり深くタッチしなかった。南京には、わずか一年滞在しただけで、28年の8月には、武漢に移る。南京大学では、外国文学系の主任として、英米文学を担当し、武漢大学では教授兼文学院院长となり、英文学を講じる。この頃から、詩の創作は少なくなり、ハウスマン、T・ハーディー、ブラウニング夫人等の翻訳が多くなる。ラファエル前派に絡めたソネットの再提唱も行われると同時に、(3)でも触れるつもりであるが、中国古典文学、特に杜甫に関する論文をその紀要に発表していく。1930年8月、聞一多は梁実秋とともに青島に来て、青島大学で教鞭を執る。この時、清華大学からも招聘する旨の連絡があったが、彼はそれを婉曲に断る。友人、つまり梁実秋と一緒にすごしたいために、それを断ったと言うわけであるが、清華大学が不穩であることも、その原因であったようである。（聞黎明『聞一多伝』）。青島大学で初めて「中国文学史」、「唐詩」、「名著選読」等の中国文学科目を講ずる。しかし、青島大学でも長続きせず、2年で、母校の清華大学に移る。北京芸術専門学校を皮切りに、南京土地局、呉淞国立政治大学、南京中央大学、武漢大学、青島大学、清華大学と、1925年から32年までの足かけ8年の間に、勤務先を6校も変え、7校目にしようやく腰が落ち着いたわけである。

それにしても、次から次へとよく勤務先を変えることができたものだと感心するほどである。彼が好むと好まざるとに拘わらず、清華学校卒業＝アメリカ留学生というレッテル並びに清華大学での人脈が概ねものを言ったようである。教師ではなく、役人となった南京土地局は除くとしても、北京芸術専門学校の劉百昭は、新月社での知り合い、つまりは、清華同窓の張嘉鏞の紹介であったし、吳淞国立政治大学も張嘉鏞の兄との縁であった。また、青島大学は清華の先輩、楊振声の招きによるものであった。ただ、南京中央大学は、宗白華への直接交渉であったが、宗白華は「創造社」の同人で、遠く辿れば、郭沫若との縁があった。また一方、武漢大学は彼が湖北省出身で、親戚の者が彼に故郷に帰って来てもらいたくて、武漢大学校長の劉樹杞に頼みこんだようではあるが。

(3)

(1)では、「朱自清日記」を取り上げて、聞一多が魯迅を韓愈に譬えたことを指摘しておいた。次に、聞一多が何故、魯迅を韓愈に準えたかについて考えてみたいと思う。

聞一多は唐詩の研究家としても知られている。この点についても、少し触れておかねばならないであろう。年代の判明している主な業績を列挙すると、以下のようなになる。

「律詩研究」(論文・1922, 3・清華學校在学中)

「杜甫」(論文・1928, 8・「新月雜誌」Vol. 6)

「杜少陵年譜會箋」[正](1930, 4・武漢大學「文哲季刊」Vol. 1-1),
「同」[續](1930, 7・武漢大學「同」書Vol. 1-3), 「同」[續](1930,
10・武漢大學「同」書Vol. 1-4), 「同」[完](1931, 1・「新月」Vol.
1-4)

「杜甫交遊錄」(目錄・1930, 3・青島にて・未刊?)

「岑嘉州繫年考証」(1933, ?・「清華學報」Vol. 8-2)

「岑嘉州交友事輯」(同・「清華週刊」Vol. 39-8)

「唐詩雜論」(1941, ?・「中央日報文藝副刊」Vol. 18/1943, ?・
「世界學生」Vol. 2-7)

その他、新・旧『聞一多全集』に等しく収められている「唐詩大系」,「全唐詩匯補」,「全唐詩辯証」等は、いずれも聞一多手稿本(北京図書館蔵)に拠ったものである。最初に書かれた「律詩研究」は、聞一多がアメリカ留学に先立って書かれたもので、当時、何人かの友人が読んだだけであった。後に、何度も手を入れたが、どういうわけか発表することを拒んでいる。英文の報告,“A Study Of Rythm In Poetry”(1921, 12・清華文學社の例会での報告)は、「詩的音節底研究」とも「詩歌節奏的研究」とも訳されている。これと「律詩研究」との類似を言うこともあるが、報告自体の原稿に基づいたものではなく、シラバスに近い形のもので、“姉妹関係”にあると言ってよいものかどうかは疑問視される。これを除く他のものは、彼が大学に職を得てから書かれたものである。

ところで、よく引かれて有名な件りであるが、詩に対して望みを持つ青年の読書計画が自らの日記(「儀老日記」1919年2月)に、次のように書かれている。

枕上讀清詩別裁。近決志學詩。讀詩自清,明以上,溯魏漢先秦。讀別裁畢,讀明詩綜,次元詩選,次宋詩鈔,次全唐詩,次八代詩選,期於二年內讀畢。

と。この日記には、沈徳潜『清詩別裁』の他、当時の流行であったハックスレー「天演論」(嚴復訳)を読むという記述が連日のように続く。こうした読書の結果が「律詩底研究」(1922, 3, 8)になったものと思われる。聞一多は、これを仕上げてアメリカに向かう。本論文を脱稿した後に書いたのが「蜜月著《律詩底研究》稿脱賦感」の詩という律詩である。ちなみに、「律詩研究」に引かれる人名の主なものは、ざっと以下のとおり。

李漢/白居易/李白/韓愈/沈佺期/宋之問/張協/陸機/潘岳/曹丕/顔延之/阮籍/稽康/謝惠蓮/鮑照/簡文帝/元帝/沈約/江淹/吳均/何遜/王籍/卓文君/蘇武/臧肩吾/張正/江總/辛延年/

宋子侯／曹植／陶潛／陳後主／杜甫／杜審言／杜牧／陸游／李商隱／
孟浩然／A. ウェイリー／與信／元好問／劉長卿／載叔倫／李賀／王
維／楊巨源／司空曙／黃庭堅／蘇軾／ワーズワース／オルデン／ブリ
ス・ペリー／梁漱溟

当時、聞一多が何故律詩を研究したかと言うと、それは「律詩底研究」に説明されている。すなわち、

- 一) 律詩爲中國獨有之體裁。
- 二) 律詩能代表中國藝術底特質，研究了律詩，中國底精神，便探見着了。
- 三) 律詩兼古詩，絕句，樂府底作用。

と結論づけて、現代文学、現代詩に話をもってゆく。

其文學誠當因時代以變體；且處此二十世紀，文學猶當含有世界底氣味；故今之參借西法以改革詩體者，吾不得不許爲卓見。但改來改去，你總是改革，不是擯弃中詩而代以西詩。所以當改者則改之，其當存之中國藝術之特質則不可沒。

と言って、郭沫若の『女神』が持つ西洋一辺倒の姿勢を批判する。これが後の二篇の「女神」評論に繋がることは、言うまでもない。また、

新文學興後，舊文學亦可并存，正坐此故。以此推之，則律詩亦未嘗不可偶爾爲之。無論如何，律詩之藝術的價值，歷萬代而不泯也。創作家縱畏難却步，不敢嘗試；律詩之當永爲鑒賞家之至寶，則萬無論疑義。

と書いているように、中国的な伝統の上に立った、新しい文学を作り出そうとしていた聞一多にとって、律詩は振り返って見るべきものであったと言える。

ところで、「律詩底研究」以外の聞一多の作品の中には、どのような詩人が出て来るのであろうか。まず、第一の詩集『紅燭』から簡単に見てゆくと、各篇の冒頭に唐代，宋代の詩人の一句が掲げられる。「蠟炬成灰泪始乾」（「序詩」）の句で李商隱，「醉月頻中聖／迷花不事君」（「李白篇」）で李白，「千林風雨鶯求友」（「雨夜篇」）で陸游，「柳暗花明又一村」（「青春篇」）で陸游，「天涯涕泪一身遥」（「孤雁篇」）で杜甫，「此物最相思」

（「紅豆篇」）で王維が出て来る。陸游を除けば、全て唐代の詩人ということになる。聞一多が好んだ唐代の詩人と言い換えてよいであろう。中でも、李商隱はこの時期、彼が最も好んだ詩人であり、イギリスの詩人キーツとともにその詩の中に引用されている。彼が詩のイメージについて論及する時、必ず挙げられるキーワードとも言うべき名前であるが、詳しくは、「聞一多と李商隱」……『紅燭』『序詩』をめぐって……上・下（「文芸と批評」Vol. 5, No. 3, No. 4 1979, 7, 同12）に譲ることとして、本稿では割愛する。

それでは、聞一多と韓愈について見てみたい。

- ① 唐時凡近體詩皆爲律詩。李漢編《韓昌黎集》，絕句都收入律詩。
六句律除太白，退之，香山偶爲之，後人作之者絕少，亦可置勿論。
- ② 《昌黎集》中亦間有之，如《謝李員外寄紙筆》云：……
- ③ 韓愈《元和聖德詩》敘劉闢被擒，全家就戮底情景曰：……
- ④ 假使退之用了律體來形容這段故事，我包他不致得樣的結果，令人發戴齒緊，不敢再讀。（以上，前出「律詩底研究」）
- ⑤ 譬如我讀完昌黎，我的三個答案是一，他應占的位置比已占的許要高一点，二，他不是抒情的乃是敘事的天才（他雖歿有作過正式的Epics），三，他是一個新派別底開山老祖。（「致吳景超，梁實秋」，1922, 10, 10）
- ⑥ 近方作《昌黎詩論》，唐代六大詩人之研究之一也。義山研究迄未脫稿，已牽延兩年之久矣。……（「致聞家駟」1923, 4, 8）

聞一多は、以上のように韓愈について書いている。「律詩底研究」に書かれる記事であるから、当然と言えば当然であるが、①～④までは、韓愈の律詩自体の問題であって、韓愈に対する聞一多の見解を延べたものではない。彼の韓愈に対する言及が少ないので、大ざっぱなことしか言えないが、④、⑤から見て、韓愈を律詩の作者として評価しながら、唐代の六大詩人の一人に数えていること、抒情よりも叙事に優れた詩人と捉えていることが理解される。

一方、魯迅は韓愈をどのように見ていたのか。

①……，有些新意，也還是不行的；不學韓，便是學蘇。韓愈蘇軾他們，用他們自己的文章來說當時要說的話，那當然可以的。我們却并非唐宋時人，怎麼做和我們毫無關係的時候的文章呢。即使做得像，也是唐宋時代的聲音，韓愈蘇軾的聲音，而不是我們現代的聲音。然而直到現在，中國人却還要着這樣的舊戲法。（『三閑集』所収，「無聲的中國」1927, 3, 27）

② 不過，我這種解釋還有點美中不足：中國自己的秦始皇帝焚書坑儒，中國自己的韓退之等說：“民不出米粟麻絲以事其上則誅。”這原是國貨，何苦違背着民族主義，引用外國的學說和事實……長他人威風，滅自己志氣呢？（『准風月談』所収，「同意和解釋」1933, 9, 3）

①の方を文字どおりに解釈するならば，韓愈や蘇軾たち自身は，自分たちの言葉で自分たちの語りたことを語っているが，後代の人々が自分たちの言葉を使わずに，彼らの言葉を使っていることに対して，魯迅は批判をしているのであって，私には，後ろにあるような韓愈の思想に対する直接的な批判ではなかったように見える。②の方は，韓愈の「原道」に対する批判ではあるが，ここでは，その矛先は外国の物を無批判に受け入れ，他人より優れていると思っている連中への痛烈な批判となっている。つまり，「新月社」同人たちへの批判をまだ続けているわけである。聞一多は，郭沫若の西洋化一辺倒を批判していたし，国粹的な気風さえ持っていたわけである。ここで批判されているのは，恐らく，当の論争相手である梁実秋であろう。なお，魯迅に，次のような一文がある。すなわち，

有些新青年，境遇正和“老新黨”相反，八股毒是絲毫沒有染過的，出身又是學校，也并非國學專家，但是，學起篆字來了，勸人看《莊子》《文選》了，信封也有自刻的印板了，新詩也寫成方塊了，除掉做新詩的嗜好之外，簡直就如光緒初年的雅人一樣，所不同者，缺少辮子和有時穿洋服而已。（『准風月談』所収「重三感舊」1933, 10, 1）

と。何か聞一多までを皮肉っているように見えるのは，私の穿ち過ぎであ

ろうか。確かに、彼は八股文の毒には染まっていないし、家塾ではなく、学校を出ている。また、美術出身で、国文出身ではない。不遇時代に篆刻を始めたし、清華大学では、『莊子多や『文選』を教えたこともある。新詩として方塊詩を提唱したのは、言うまでもなく聞一多だったというわけである。

韓愈と言えば孟郊というぐあいには、韓愈と孟郊とは並び称せられている。聞一多は、青島時代の学生、臧克家の詩集『烙印』に「序」を書いて(1933, 7), 次のように言っている。

孟郊并没有作過成套的“新樂府”，他如果哭，還是爲他自身的窮愁而哭的次數多，然而他的態度，沈着而有鋒棱，却最合于一個偉大的理想的條件。除了時代背景所產生的必然的差別不算，我拿孟郊來比克家，再適當不過了。

と。つまり、聞一多は臧克家を孟郊に準えているわけである。「孟詩韓筆」、あるいは「孟詩韓文」と言う言葉や、「郊寒島瘦」という言葉があるように、孟郊を出すということは、韓愈あるいは賈島を出すということに等しいと考えることが多いのではないか。我々はつい、臧克家を孟郊に比定するならば、その師に当たる聞一多は韓愈ではないかと思ってしまうが、彼は「序」の半分ほどを孟郊と蘇東坡との比較に費やすのである。また、2年後の1935年5月21日に、清華文芸社の集会があり、次のように、述べている。

聞先生在清華時爲清華文學社之主要社員，今又身臨此文藝社，乃大談感慨。後又談論孟郊，認爲孟郊之詩，其思想，方法皆爲‘最現代的’，爲孟郊大作義務宣傳。

と。聞一多は、臧克家『烙印』「序」で述べているように、孟郊の詩の中に、「現代性」を認めていると同時に、

克家如果跟着孟郊的指示，准沒有錯。縱然像孟郊似的，沒有成群的人給叫好，那又有什麼關係？反正詩人不靠市價做詩。克家千萬不要忘記自己的責任。

と言って、「生活の中で磨かれた力、孟郊が我々に与えてくれた力によって、生活してゆきさえすればいい」と励ますのである。

もう一つ、ついでに触れておきたいことがある。蘇雪林が何故か、徐志摩を韓愈に準え、聞一多を孟郊に準えている一文がある。

徐志摩與聞一多爲《詩刊》派的一雙柱石。徐名高于聞，但實際上徐受聞之影響不少。——徐天才較高，氣魄比大，而疵病又較多，如長江大河挾泥砂而并下，聞則如逼陽之城，雖小而堅不可破。他們都是好朋友，作品之進步得于切磋者至大，我們若戲謂徐爲韓愈，聞便是孟郊了。

（『現代』第四卷第三期，1934）

と。聞一多の臧克家評も、蘇雪林の聞一多評も、孟郊が韓愈より年上であったこと、科挙の試験に受からなくて、六十歳になってはじめて役人になれたこと、生涯貧乏であって一度は役を免ぜられて、新たに任地に赴任する時、死んだなどという、孟郊に付きまとう伝説的なものとは無縁のようである。要するに、詩人として、その詩の持つ特徴についてで判断がなされていることに注意をしておく必要がある。

こうした点から判断してみても、聞一多が魯迅を韓愈に譬えたことも、魯迅流の韓愈に対する道学先生としての堅い、マイナスのイメージではなく、カッチリとした格律を持った詩及び文章に対するほめ言葉であったと考えていいのではないか。聞一多は、浪漫派としては李商隱を、古文復興運動の創始者としては、韓愈を評価していたことの裏返しでもあったようにも思われる。魯迅が①で、韓愈を「文体改革者」として位置づけた点では、聞一多の認識とそれほど大きく掛け離れていたとは思われないわけである。蘇雪林が徐志摩を韓愈に準え、聞一多を孟郊になぞらえたのも、同様なのかも知れない。時間的には、蘇雪林は、臧克家の『烙印』と、聞一多の「序」を見る機会が十分にあったはずだからである。

（4）

また、8年後の1944年10月19日、昆明で開かれた「魯迅逝世八周年紀念

会」で、行った発言が「在魯迅逝世八周年紀念會上講話」（王康『聞一多傳』に拠る。湖北人民出版社 1979,5）である。少々長いものであるが、以下に引用しておく。

- ① 有些人死去，盡管鬧得十分排場，過了沒有幾天，就悄悄地隨着時間一道消逝了。很快被人遺忘了。有的人死去，盡管生前受到很不公平的待遇，但時間越過的久，形象却越加光輝，多的聲名却越來越偉大。我想，我們大家都會同意，魯迅是經受得往時間考驗的一位光輝偉大的人物。因為他對中華民族的文化事業留下了寶貴的遺產。他是中國歷史上最大的文學家。

魯迅生前所處的環境異常危險，他是一個被“通緝”的“罪犯”！但是他無所畏懼，本着有一分熱，發一分光的精神，他勇敢，堅決地做他自己認為應做的事，在文化戰線上打着大旗衝鋒陷陣，難怪有的人為什麼那麼恨他。

魯迅留學在日本，往在十里洋場的上海，他和洋人，和大官過不少交道。但他對帝國主義，對買辦大亨，對當權人物，沒有絲毫的奴顏媚骨，寧可流亡受苦，也不妥協。魯迅之所以偉大，之所以能寫出那麼多偉大的作品，和他這種高尚的人格是分不開的，學習魯迅，我想先得學習他這種高尚的人格。

有人不喜歡魯迅，也不讓別人喜歡，因為嫌他說話討厭，所以不準提到魯迅名字。也有人不喜歡魯迅，倒願意常常提到魯迅名字，是為罵罵魯迅。因為，據說當時一旦魯迅回罵就可以對某些人表明自己的“忠誠”。前者可謂之反動，後者只好叫做無耻了。其實，反動和無耻本來也是分開的。

除了這樣兩種人，也還有一種自命清高的人，就像我自己這樣的一批人。從前我們住在北平，我們有一些自稱“京派”的學者先生，看不起魯迅，說他是“海派”放在眼上的。現在我向魯迅懺悔：魯迅對，我們錯了！當魯迅受苦受害的時候，我們都正在享福，當時我們如果都有魯迅那樣的骨頭，那怕只有一點，中國也不至于這樣了。

罵過魯迅或者看不起魯迅的人，應該好好想想，我們自命清高，實際上是做了幫閑幫凶！如今，把國家弄到這田地，實在感到痛心！現在，不是又有人在說什麼聞××在搞政治了，在和搞政治的人來往啦，以為這樣就能把人嚇住，不敢搞了，不敢來往了。可是時代不同了，我們有了魯迅這樣的好榜樣，還怕什麼？紀念魯迅，我想應該正是這樣。

と。「魯迅逝世八周年紀念會」会上での發言の記録は、王康の他にも何種類かある。「紀念會」に最も時期的に近いのが「雲南晚報」（1944, 10, 20, 付け）所載の「魯迅活在青年心里……八周年忌晚會雜輟」で、それには、次のように書かれている。

- ② 有人說‘魯迅是中國的孔聖人！’聞一多先生說這是不對的，‘魯迅大于孔聖人，是中國的聖人是對的，但他却不是中國的孔聖人’。聞先生作了比較：‘孔子是□ [拉] 着時代後退的，魯迅則是推着時代向前進！’接着他又舉出魯迅先生轉移過來的觀念：‘天災人禍有人說是爲了“天命”，魯迅先生轉移了他，說這是人謀之不臧，這就是魯迅之所以不同于舊聖人，而是新聖人之点！’

と。尚士「痛憶聞師」（「人物雜誌」Vol. 2-9 1947, 9, 15）では、

- ③ 給我印象最深的還是先生的講詞，他說：‘時間愈久，越覺得魯迅先生偉大，今天我代表自英美回國的大學教授，至少我個人，向魯迅先生深深懺悔！’語意沈重，每個字吐得慢而清楚，聲音里充滿了懇摯的熱情，略微停頓一下又繼續說下去，‘日本在政治上是封建的，經濟上是資本主義，然而在文學思潮上終始進步的，因爲明治維新前後，日本也受歐美帝國主義的欺負，他們也是多介紹被壓迫的弱小民族的文學。魯迅先生除介紹這些到中國之外，還特別注意東歐和北歐作品的翻譯，于是奠定了今天中國的文藝道路。然後再看看從英美回來的貢獻些什麼成績呢？我真慚愧！……’先生竟能在幾千大學生面前這樣公開懺悔，二人真是同其偉大，先後輝映！”

と述べている。王一「哭聞一多先生」（重慶「新華日報」1946, 7, 26）は、聞一多の暗殺後11日目に発表されたものである。

- ④ 従前我們在北平罵魯迅，看不起他，說他海派，現在，我要向他懺悔，我們罵錯了，海派爲什麼就要不得？我們要清高，清高弄到國家這步田地，別人說我和政治活動的人來往，是的，我就要和他們來往。

と述べている。その他、『年譜長編』は、出典を明らかにしていないが、

- ⑤ 先生演講中說到在北平的“京派”當然如何瞧不起魯迅，稱他爲“海派”時，忽然轉過身來，向着台正中的魯迅木炭畫像恭恭敬敬地鞠了一躬，表示道歉，使滿場的人大爲感動。

と書く。これらの記述からも、大まかではあるが、聞一多が8年間の中に、魯迅に対する理解を深めて行った経緯を知ることができるのではないか。

聞一多にとっての、昆明における8年間をごく簡単にまとめてみると、以下のようなだろう。1937年7月、蘆溝橋事変が起き、8月には、教育部は北京大学、清華大学、南開大学をまとめて、武漢で臨時大学を開くことに決定する。聞一多はこの年、サバティカル休暇に当たっていたが、学校側の強い要請を受けて、休暇を返上し、臨時大学と行を共にすることになる。武漢に危険が迫り、大学はさらに長沙に移転する。翌年2月、はるか南方の地である昆明に移ることになり、聞一多は学生とともに、長沙から昆明までの1600キロを歩いて踏破する。これが世に言う「西南連合大学」である。彼は、大学とともに一時期、蒙自で過ごすか、また昆明に戻り、1946年7月15日、国民党の手で暗殺されるまで、彼は昆明を離れることがなかった。「魯迅逝世八周年紀念」の大会も昆明で参加したというわけである。当時、この昆明には、文化人が多く集まっているということで、共産党もその勢力確保のために、著名な文学者を派遣している。茅盾がそうである(1937,12)し、曹禺もそうである(1939,7)。老舍は1941年9月に、昆明に来ている。郭沫若とも、昆明で初めて会っているはずである。聞一多自身は、1944年の秋に中国民主同盟に加入する。こうして、1944年10月の「魯迅逝世八周年紀念晚會」を迎えるわけである。

この間に、毛沢東は魯迅に関する重要な発言をしている。まず第一回目のもので、1937年10月19日、「陝北公學」で行われた「魯迅逝世周年大

會」における講話、「魯迅論」（或いは「論魯迅精神」）である。ここでは、彼の政治的パースペクティブの確実さ、彼の闘争精神、そして、彼の犠牲精神を称え、これらをまとめて「魯迅精神」とし、それを学び広めようと主張するわけである。よく知られた箇所としては、

魯迅在中國的價值，據我看要算是中國的第一等聖人，孔夫子是封建社會的聖人，魯迅是新中國的聖人。

などがある。次いで、1940年1月19日には、「新民主主義論」が発表される。これは、「中國向何處去」など15の部分に分かれているが、第十二番目の「中國文化革命的歷史特點」の中で、魯迅に触れている。特に以下の箇所はよく引かれていて有名である。

魯迅是中國文化革命的主將，他不但是偉大的文學家，而且是偉大的思想家與偉大的革命家。魯迅的骨頭是最硬的，他沒有絲毫的奴顏與媚骨，這是殖民地半殖民地人民最可貴的性格。魯迅是在文化戰線上，代表全民族的大多數，向着敵人冲鋒陷陣的最正確，最勇敢，最堅決，最忠實，最熱忱的空前的民族英雄。魯迅的方向，就是中華民族新文化的方向。

1942年2月8日の演説、「反對黨八股」にも、

黨八股也就是洋八股，魯迅是早就反對過的。

と、魯迅の名前が出て来る。この年の5月2～23日に延安で開かれた文芸座談会での講話が「在延安文藝座談會上的講話」というわけである。そして、この話をその年の「魯迅逝世七周年」記念日に、「解放日報」が特に発表したわけで、魯迅との関係が深いのも故なしとはしないであろう。ここでは、六度にわたって魯迅の名前が出て来る。

- ① 文藝是爲資產階級的，這是資產階級的文藝，像魯迅所批評的梁實秋一類人，他們雖然在口頭上提出什麼文藝是超階級的，但是他們在實際上是主張資產階級的文藝，反對無產階級的文藝的。
- ② 魯迅曾說：革命文藝戰線的不統一是因為缺乏共同的目的，而這個共同目的就是爲工農。（以上，結論(一)）
- ③ 否則你的勞動就沒有對象，沒有原料或半製品，你就無從加工，你就

只能做魯迅在他的遺囑里所諄諄囑咐他的兒子萬不可做的那種空頭文學家或空頭藝術家。

- ④ 高爾基在主編工廠史，在指導農村通訊，在指導十幾歲的兒童，魯迅也用了許多時間與普通學生通訊。（結論(二)）
- ⑤ 「還是雜文的時代，還要魯迅的筆法」把雜文和魯迅筆法僅僅當作諷刺來說，這個意見也只有對於人民的敵人才是對的。魯迅處在黑暗勢力統治下面，沒有言論自由，故以冷嘲熱諷的雜文形式作戰，魯迅是完全正確的。……「雜文時代」的魯迅，也不會嘲笑和攻擊過革命人民和革命政黨，雜文的筆法也和對敵人的完全兩樣。（結論(四)）
- ⑥ 魯迅的兩句詩，「橫眉冷對千夫指，俯首甘爲孺子牛」，應該成爲我們的座右銘。（結論(五)）

と。このように、毛沢東の魯迅に関する諸論文をしてみる、聞一多が昆明で行った「魯迅逝世八周年」の挨拶の中には、毛沢東の魯迅評価が色濃く投影されていることが分かる。先程、茅盾、老舎、郭沫若が相次いで昆明を訪れたことを指摘しておいたが、昆明の文化界は、かなりの部分に共産党の支配下にあったと考えてよいであろう。したがって、毛沢東の魯迅評価についてもインテリたちの間ではかなり一般的であったのではなかろうか。では以下、時間を追いながら対照していつてみたい。なお、ここに挙げたものは、いずれも聞一多本人の手になるものではなく、同僚や弟子などの親しいものが書いたものである点は、差し引いておかなければならぬし、『年譜長編』の編者たちの考えでカットされている部分も当然あることと思う。

まず、一番早い時期の、②の「雲南晚報」のものは、魯迅を孔子に準えていて、「魯迅は中国の孔子だ」という言い方に対する批判を述べている。毛沢東は魯迅を孔子に並べているが、聞一多はそれを布衲したような形で、むしろ孔子より偉大であると言っているように読み取れる、ここに出てくる「ある人」を毛沢東に取れば、批判的な言葉ということになるが、毛沢東の言ったことが誤解され、喧伝されていることに対する、もの言いのよ

うに思われる。次に時期の早いものは、聞一多が暗殺された直後に書かれた④の、重慶「新華日報」に掲載された王一「哭聞一多先生」である。無論、外のことも言っているであろうが、魯迅を罵り、軽蔑していたことに対する自己批判と、政治活動に加わる、或いは加わっていたことの表明である（聞一多は政治があまり好きではないと言いながら、彼は五四運動を始めとして、結構多くの運動に参加している）。魯迅の追悼会であるから、当たり前と言えれば当たり前ではあるが、彼が「新月社」の社員として、魯迅を軽視していたことに対する自己反省が聞一多の魯迅観の最も重要な要素であったことは、これらの書き手の多くが指摘をしていることから分かる。⑤に至っては、その会場で魯迅の画像に向かって恭しく一礼したことまでを抄録するわけである。③も基本的には④の論調とさしたる変化がないように思われるが、「時間が経つにつれて、魯迅先生の偉大さが感じられる」という聞一多の言葉は、自己反省と陳謝の気持ちが入り交じった本音であろう。最後の①は、聞一多の学生で、後の北京大学教授王康氏が1979年に書いたものである。44年当時は録音設備などもなく、筆記に頼る部分が多かったと思われる。聞一多が魯迅を手放しで称賛しているように読めるといって、同氏の記録に疑義を差し挟むつもりはない。ただ、氏による聞一多発言の記録は、意識的無意識的に拘わらず、毛沢東の評価をなぞった形で行われているようにも思われるが、譬え、時間の経過による美化作用が働いたとしても、師の身の回りにいてその行動を具さに見聞きした人の言葉には、余人にはない迫力があると言えよう。

(ま と め)

最後に簡単にまとめておくならば、五四運動時期に青年時代を送った聞一多にとって、魯迅は、常に尊敬さるべき人物であった。これまで見て来たように、魯迅は、彼の人生の節々に登場して来て、その在り方を考えさせる存在でもあった。新進気鋭の若手詩人であった頃は、魯迅の将来に対する洞察に理解が及ばないこともあって、軽蔑の念すら持ったとは言え、

その気質の類似に思いを致すこともあった。そうした聞一多は、魯迅が死んだ年には、新月社の他の同人（梁実秋）などとは、すでに違う観点、違う立場に立ちつつあったとすることができるであろう。私自身としては、この時点の聞一多の評価が比較的公平であると考えている——彼自身の感性で評価を下したという意味で——。本稿では十分に論及し得たとは言えないが、その当時の魯迅観を見るキーワードとして、再度「文人」の語を挙げて、後稿を期することにしたい。さらに、魯迅死後八周年の段階では、聞一多は毛沢東の魯迅評価に近い到達点を示していたわけである。当時の知識人の中の多くが、それほどまでに抗日戦争に心を痛め、戦後の中国の在り方を模索していたことの一つの証左ということになる。そして、晩年の昆明での政治的立場と行動とが聞一多の今日的評価の基層部を構成していることは改めて言うまでもないであろう。

(完)

本稿は、1995年7月9日、慶応大学主催の第三十回早慶中国学会で講演した草稿に手を加えたものである。また、同時に平成七年度早稲田大学特定課題研究「聞一多の総合研究」の研究成果の一環でもある。